

## シネマ日記



No. 62

○月×日 「無言歌」(王丘監督)の舞台は、中国西部のゴビ砂漠。風が轟々と鳴り砂が舞う。一本の樹も見えない荒涼たる風景の中で、空の濃い青だけが美しい。農場とは名ばかりの収容所と呼ぶほうがふさわしい、土肌が剥き出しの穴倉の壕に押し込められた男たち。「右派」とされた彼らは、労働によって思想を改造することを命じられ、瘦せた大地で不毛な開墾を強制される…。1949年に中国共産党が政権を樹立して間もない56年、ソ連でスターリン批判が行われたのを契機に、中国でも「雪解け」機運が生まれた。当初、党は党への批判を許しただけでなく奨励さえした

という。「百花斉放・百家争鳴」だ。ところが57年6月、突如、党批判した者たちの粛清に方針を転換、「反右派闘争」が展開された。建國に貢献した知識人の多くが右派分子として槍玉となり、犠牲となった。この粛清の犠牲者は数百万人に達したという。映画は、辺境の地に連れてこられた彼らの悲惨な状況の一つ一つをあくまでも冷静に描いていく。さながらドキュメンタリー・フィルムを見るようだ。配られる食事は水のような粥だけ。極寒の地にあつて、餓死するしかない。こうした極限の飢えの中で、墓を掘る力も失われ、死体は野ざらしにされるほど…。過酷な状況下、無念さを押し殺したかに見える人々の表情には、人間としての尊厳さえうかがえる。砂漠を吹き荒ぶ風の音が、非業の死を遂げた彼らの「無言歌」として聞こえ、慟哭の悲しみと深い怒りを禁じえない。中国現代史に立ち返ると、この「反右派闘争」を契機に今日まで、中国では言論の自由が失われたといつてよいだろう。映画

は、実際にゴビ砂漠で撮影されたが、すべて秘密裡に行われ、編集はフランスで行ったという。無論、中国国内では上映が禁止されている。

○月×日 1942年、パリ。ユタヤ人が一斉に検挙された。10歳の少女サラはとっさに、弟を納戸に隠して鍵をかけた。すぐに戻れると信じて…。が、サラと両親は収容所へ。アウシュビッツへの途次、サラだけ奇跡的に脱出できたのだが、はたして弟を助けることができたのか、二人は今も生きているのだろうか。

「サラの鍵」(シル・パケルプレネル監督)は、アメリカ人女性記者が偶然、かつてサラのいたアパートに住むことになって、60年前のその事件を知り、謎を解くことで、サラの足跡をたどっていく物語だ。一家に起きた過去の悲しみと痛みを知ることを通じて、彼女も自らの人生をリセットし、未来へ再出発を図っていくという重層的なストーリー展開だ。運命の過酷さの中にも、一筋の光のような幕切れに救われる構成だ。

○月×日 中東系のカナダ人女性が実の子である双子の姉弟に、遺言とともに存在さえ知らされていないかった父と兄への手紙を託して世を去る。父と兄探しの中東への旅が始まるが、亡き母をめぐる衝撃的な事実の数々、「灼熱の魂」(トウニ・ヴィルヌーヴ監督)を見ることになる。中東でのイスラム教徒とキリスト教徒の虐殺も厭わない争い、緊張感あふれた謎解き…。が、衝撃のラストには正直、唾然となった。異教徒への憎しみの強さには、日本人の理解を超えるものがある。

○月×日 開戦に反対した「山本五十六」(成島出監督)だったが、聯合艦隊司令長官として真珠湾攻撃を指揮。「戦争を早く終わらせるため」の苦渋の選択というが、敗戦を知ることなく南方で撃墜されたことは指揮官として幸せだったのでは、とも思った。役所広司が好演。被災地・浦安が舞台の「カルテット」(三村順一監督)は、家族が絆を取り戻す物語。浦安の住人である筆者は、思わずほろっとさせられた。(内藤哲